



## 白い馬の季節 (季風中的馬／Season of the Horse)

2007(平成19)年11月3日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)

監督・脚本=寧才ニンツァイ／出演=寧才ニンツァイ／娜仁花ナレンカ／常 蘭チヤンラン 天テン (ワコー、フォーカスピクチャーズ配給／2005年中国映画／105分)

……大気と水を中心とする中国の環境問題は深刻だが、モンゴル草原の砂漠化はもっと深刻！ 草原を失った遊牧民は一体どこへ……？ そんな問題に真正面から取り組んだのが、監督・脚本の他、時代に取り残された遊牧の民ウルゲン役で主演したモンゴル族の大型新人寧 才ニンツァイ。象徴的なタイトルだが、映画を観れば理解はバッチリ！ 彼が投げかけた重大な問題提起を、私たちはどう受け止め、どんな行動を起こすの……？ それが問われているはずだが……。

### 寧 才ニンツァイに注目！

「中国映画の全貌2007」における特別プレミアム上映が、この『白い馬の季節』。これは、2005年ハワイ国際映画祭 NETPAC AWARD (最優秀アジア映画賞) 受賞、2005年ダーバン国際映画祭最優秀撮影賞 (ジョン・リン) 受賞などで話題を呼んだ作品で、2007年10月6日より岩波ホールでロードショー公開されたもの。

タイトルだけでは何の映画かサッパリわからないが、まず注目すべきは、監督・脚本・主演したモンゴル族出身の寧 才ニンツァイ。彼はまず俳優として、砂漠化によってモンゴルの草原が次々と死んでいく中、遊牧民としてしか生きられない誇り高き男 (不器用な男?) ウルゲンに扮し、その苦悩を見事に演じている。

現在のモンゴルが直面している砂漠化という問題に、監督として真正面から向き合い、そのための脚本を自ら書き、さらに自ら主演するという形で問題提起ができたことは実にすばらしい。あとは作品のヒットを願うばかりだが……。

## 草原の喪失と砂漠化は大問題！

この映画は、そんな草原の男ウルゲンと夫を支えながらも現実的な生き方を模索する妻インジドマ（ナレンホフ娜仁花）、そしてその一人息子のフーフが、地球の温暖化等の原因によって否応なく発生している草原の喪失と砂漠化という現実の中で苦悩する姿を描くもの。都市問題をライフワークとしている私にとって、中国大陸の砂漠化と水不足は地球的規模における大問題だと認識しているが、それがこんな形でモンゴルの草原に影響を及ぼしていると知ってビックリ。

この映画に描かれているように、政府は一定の草原を国有地として囲い込んで自然保護区を拡大し、そこでの放牧を禁止することによって草原の回復をはかるという政策をとっているらしい。そして、それは一定の成果をあげているようだが、この映画にみるように、そんな政策によって自由な放牧が禁止されたウルゲンにとっては、それが死活問題になることは明らか。

騎馬民族であるモンゴルの民は遊牧の民。そして、遊牧の民の命は馬……。そんなイメージは豊かな草原があってこそこの話で、草原の砂漠化は彼らの死活問題。あなたはこんな問題提起をどう受け止める……。ノー天気で平和ボケの日本民族も、こんな映画を観て少しは覚醒しなければ……。

## ヨーグルトの販売もダメ……？

不器用な遊牧の民ウルゲンと違ってインジドマは現実派……。インジドマほどの美貌があれば全く違う社会に出ても立派に生きていけるはずだと私は思うのだが、本人にそんな認識がないのは当然。彼女が革商人トゴーから教えられてわかったのは、せいぜい、自分が日々の糧としてつくっているヨーグルトを街道沿いで販売すればそれなりの現金収入を得ることができるということくらい。

そこで早速インジドマは、おカネがないから学校へも行けない一人息子のために街道沿いでヨーグルトを売り、親切な漢族の中年男ツァオ（チャン・ランティエン常 蘭 天）の協力によって現金収入を得ることに。ところが、頭の固いウルゲンはそれが全然気に入らないらしい。そこでウルゲンは、インジドマがヨーグルトを運んでいった大八車（？）をつぶしてしまおうというバカげた行為にまで……。こりゃちょっとひどすぎるのでは……？

## 興味深い人物が3人

この映画には、主人公ウルゲンの生き方と対比されるべき男が3人登場する。その第1は、革商人のトゴ。彼はウルゲンと正反対で、時代の流れをいち早く読んで貨幣経済や流通システムを勉強し身につけているから、当然都会暮らしが向いている。そして、インジドマにヨーグルト販売を教えたり、ウルゲンが命よりも大切にしている愛馬の売買の仲介をしてピンハネしたり（正当な利益を得たり？）と激動の時代をイキイキと生きている。

その逆に、都会で十分成功したにもかかわらず、草原での暮らしに憧れている中年男がツァオ。彼が最初にインジドマからヨーグルトを買ったのは偶然かもしれないが、その後大量に買ったりしながらインジドマに近づいてきたのは、きっとインジドマの魅力に惹かれたため……？ この映画にはそんな夢見るような男なればこそその、トンチンカンな行動やセリフが登場するので、それにも注目！

また、ウルゲンが時代の流れに乗れず取り残される「負け組」の典型なら、画家として大成功しているビリグは「勝ち組」の典型。勝ち組として忙しい生活に明け暮れているビリグは、幼なじみだからというだけの理由でウルゲンからある依頼を受けても、それにかまうヒマはないらしい。そこで、失われた人間関係は永久に回復しないと私は思ったのだが……？

この映画が面白いのは、こんなウルゲンと対照的な3人の人物像がくっきりと描かれているから。

## 白い馬は何を象徴……？

この映画のタイトルとなっている「白い馬」は何を象徴するの……？ それがこの映画のテーマであり、寧<sup>ニッツァイ</sup>才監督の脚本づくりのうまさもそこに凝縮されている。

白い馬の名前は「サーラル」だが、このサーラルは1度売られてしまう。いつまでも遊牧生活に固執していたウルゲンも、遂に妻インジドマの説得に負けて愛馬の売却を承諾してしまうわけだ。そして、妻と子は草原を捨てて町の生活に。しかし、環境順応能力のないウルゲンは日々悶々とした生活を……。

ところがある日、愛馬サーラルが町のディスコでいかがわしいショーの舞台上に登場しているのを見て愕然とするウルゲン。それを取り戻すことができたのは、ウルゲン

の友人で今は画家として大成功しているビリグのおかげ。この点をめぐるウルゲンとビリグの人間関係も面白いから、それにも是非注目。

この映画で最高に面白いのは、取り戻したサーラルの上に、ドン・キホーテのような鎧兜に身を包んでまたがるウルゲンの姿。彼はこんな姿で一体どこに……？ そして遂にラストでは、サーラルは野に帰されていくことに……。

さあ、この白い馬サーラルに、あなたは何を見る……？

2007(平成19)年11月10日記

#### ミニコラム

### ユー・ナン 余男さん、ごめんなさい！

『トゥヤアの結婚』はすばらしい映画だったが、その主演女優余男ユー・ナンが鞏俐ゴン・リ、章子怡チャン・ツイイーに続く第3の国際女優という評価について、私は評論の中で「若干疑問あり」と書いてしまった。しかし、08年3月28日付産経新聞夕刊における女優余男の写真をみると、それが完全な誤りだったことが明らかに。つまり新聞紙上には、私が映画の中で観た、内モンゴルの厳しい自然の中で暮らす浅黒い肌をした(?)トゥヤアユー・ナンに扮した余男とは全然違う、洗練された現代的な美女が微笑んでいたわけだ。

95年に北京電影学院に入学した彼女は、卒業後『月蝕』『驚蟄』の好演ですぐに知名度を上げ、中国金鷄獎最優秀主演女優賞などを受賞した正当派美人女優とのこと。女性なのに男の漢字が使われているので名前はすぐに覚えられるはず？ 演技力のたしかさはもちろんだが、英語の他フランス語にも堪能という彼女の才能は、ひょっとして鞏俐ゴン・リ、章子怡チャン・ツイイー以上かも？ 08年に30歳を迎える、恐るべき美人女優の今後に注目しよう。

2008(平成20)年4月9日